巻頭言

研究開発に想う

編集理事　渡辺　貞一

今夏，北陸を旅した折，福井の永平寺を訪れた．数百年を経た大きな杉の木に囲まれて建つ永平寺は，厳しい修行で知られる曹洞宗の総本山である．早朝のお勤めに参列したが，薄暗い法堂で百人を越える修業僧の読経を聞いていると，昔，実家に居たころ，ここで修業したという檀家の住職が話してくれた言葉が思い出された．道元が中国の飯炊きの老僧からいわれた「偏界（ヘンカイ）　曾（カ）ツテ　蔵（カク）サズ」である．永平寺の開祖である道元は，この言葉を聞いて深く悟るところがあったという．

研究開発を後で振り返る時，この言葉に共鳴するところが多い．研究開発の各場面で，我々は物事をみているようでみていず，わかっているようでわかっていないと感ずることが少なくない．すぐそばに居ながら見逃してしまったものや，回り道をしてたどり着いたものなど，数多くあり，「どうして，あの時，これに気が付かなかったのだろう」と思うことがしばしばある．そして，あの時はよく見えなかったが，振り返ってみると「天の下　なに一つ蔵されていない」という言葉を実感するのである．

我々は，物事を学問の力でみようとしている．学問の基本を習い，その合理的な体系の上に物事を見，理解しようとする．物事は，この基本学力がしっかりしていないと，本質がみえないようにできている．しかし，また研究は，それだけでは不充分であるように思う．科学技術に立脚した学問は没個性的であるが，その研究の見方，理解の仕方には，研究者の個性が色濃く反映している．優れた研究には，研究者の持つ思想や哲学があり，それが一つの指導原理となって，物の見方や考え方を決めているように思う．一流の研究者は，十分訓練された技量に加え，個性豊かな独自の思想や哲学があり，その両者が相まって，未知の事柄や体系を予見し，物事を深くみているのである．研究への取組み方，対象の見方，理解の仕方などが，自分の思想で述べられている研究には，独特の大きな魅力がある．この個性豊かな思想や構想が，「曾ツテ　蔵サズ」の真実を見出すように思えてならないのである．

研究開発は，大きなエネルギーを必要とし，また研究者のすべての能力を要求するものなのであろう．